

## 口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台  
火山監視・情報センター  
鹿児島地方气象台

11 月 17 日から 21 日にかけて、気象庁機動調査班が火山ガス観測及び光波測距観測<sup>1)</sup>を実施しました。

火山ガスの観測では、二酸化硫黄の放出量が 10 月以降やや増加していました。

光波測距<sup>1)</sup>による地殻変動観測では、新岳火口の膨張を示す変化が認められました。

口永良部島では引き続き火山活動は高まっており、火口から概ね 2 km の範囲に影響を及ぼす噴火の発生が予想されますので、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要です。

### 活動概況

#### ・気象庁機動調査班による観測結果（図 1、図 4、図 5）

気象庁は 11 月 17 日から 21 日にかけて気象庁機動調査班による観測を実施しました。

18 日に実施した光波測距<sup>1)</sup>による地殻変動観測では、新岳火口の膨張を示す変化が確認されました。

20 日に実施した火山ガスの観測では、二酸化硫黄の放出量が前回（10 月 4 日）と比べやや増加していました。

1) レーザーを用いて山体に設置した反射鏡までの距離を測定し、山体の膨張や収縮による距離の変化を観測します。

#### ・地殻変動（図 1～3）

GPS による地殻変動観測では、9 月頃から新岳火口浅部の膨張を示す変化が観測されており、現在も続いています。

#### ・噴気の状態（図 1、図 7、図 8）

遠望観測では、11 月に入り白色の噴気が火口縁上 20～200m まで上がっています。

#### ・地震、微動活動（図 1）

火山性地震は時々発生しましたが、火山性微動は少ない状態で経過しました。

---

この資料の作成に当たっては、気象庁のデータの他、国土地理院、京都大学、独立行政法人産業技術総合研究所のデータも利用して作成しています。

地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ(標高)』を使用しました(承認番号：平 17 総使、第 503 号)。

この火山活動解説資料は、気象庁ホームページ(<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>)、福岡管区气象台ホームページ(<http://www.fukuoka-jma.go.jp/>)でも閲覧することができます。

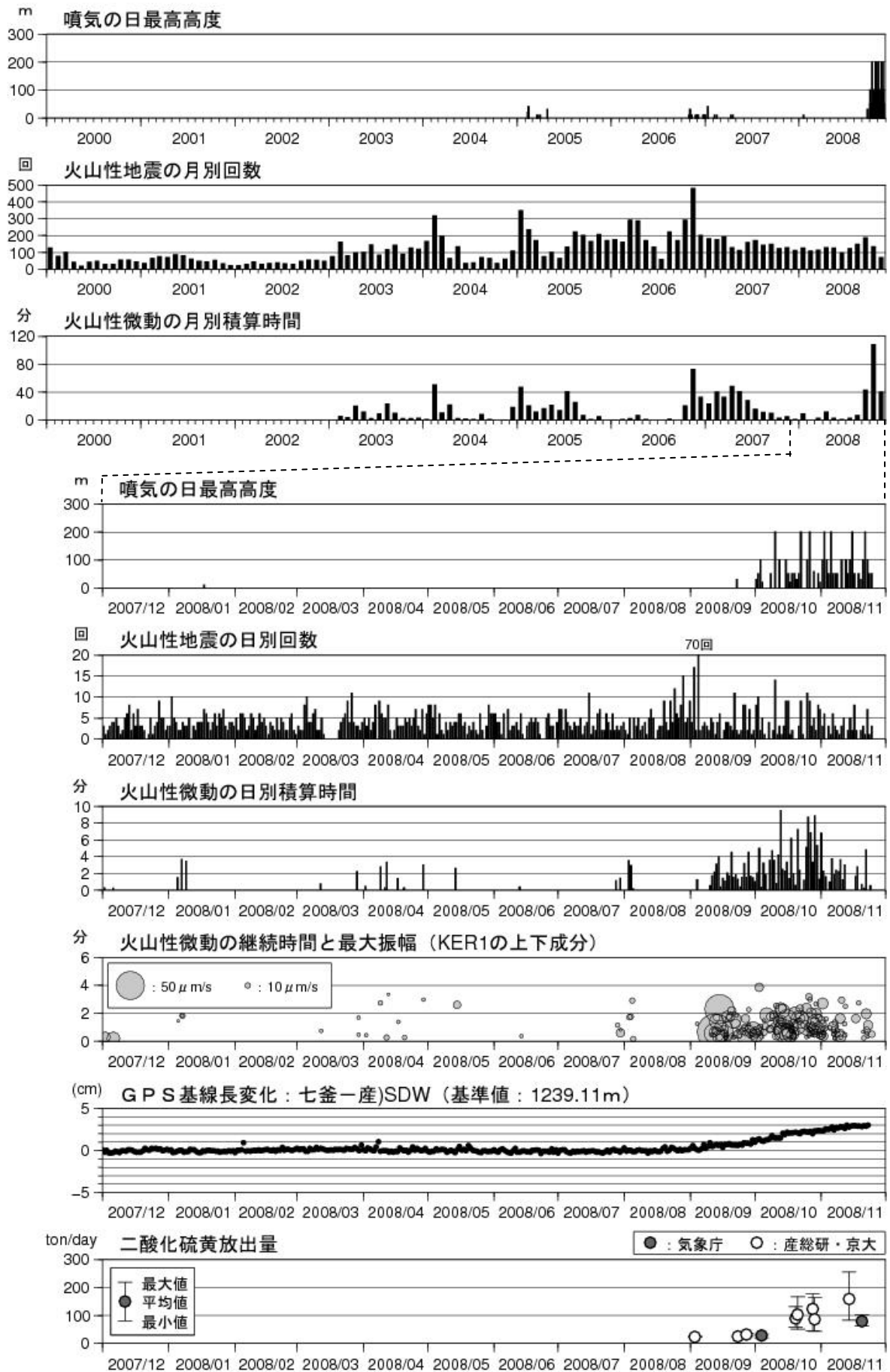


図 1 口永良部島 最近の火山活動の推移 (2000 年 1 月 1 日 ~ 2008 年 11 月 24 日)

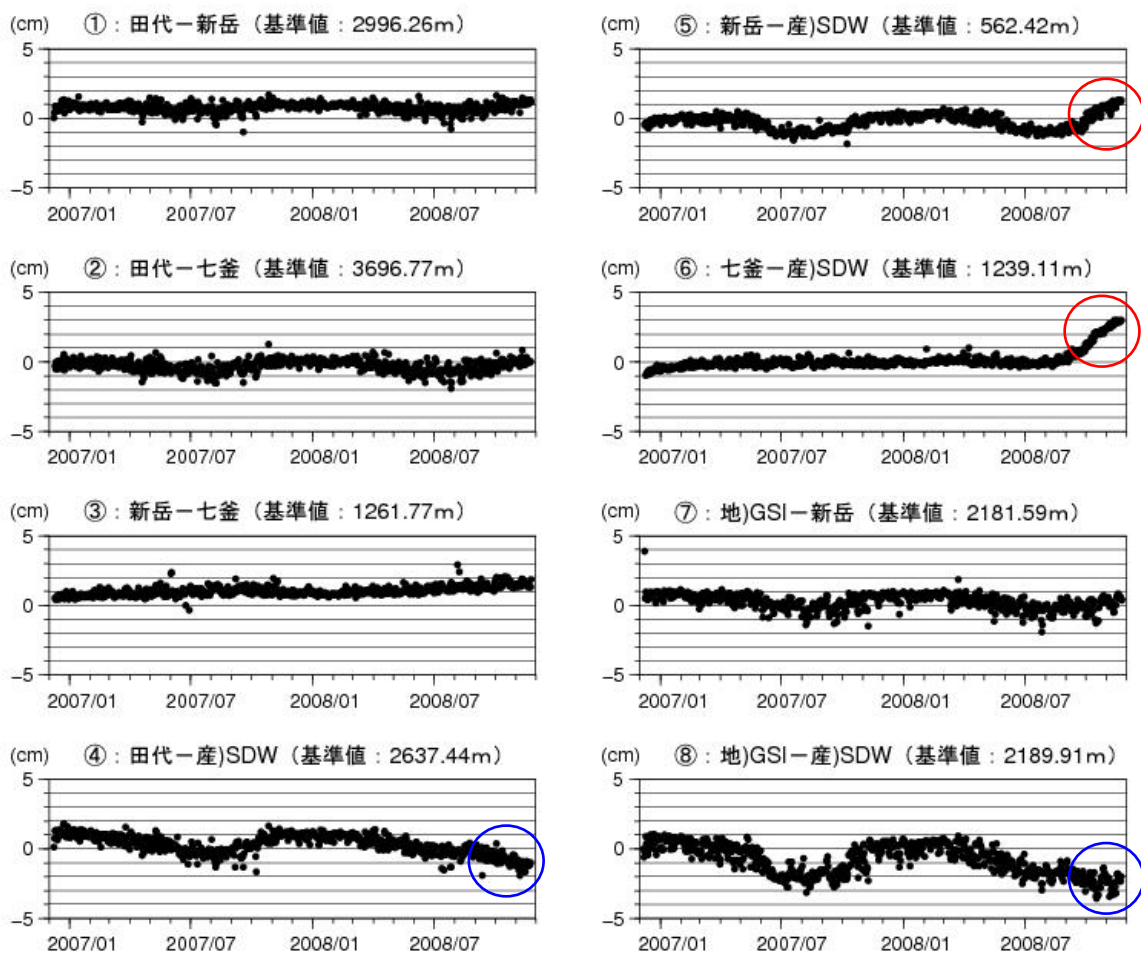


図2 口永良部島 GPS連続観測による基線長変化(2006年12月8日~2008年11月24日)  
9月頃から新岳火口の膨張を示す変化が認められます(○は伸び、○は縮みを表す)。  
この基線は図3の ~ に対応しています。

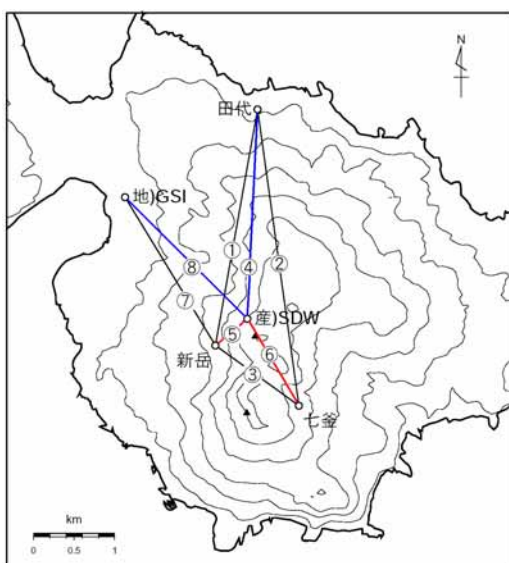


図3 口永良部島 GPS連続観測基線図

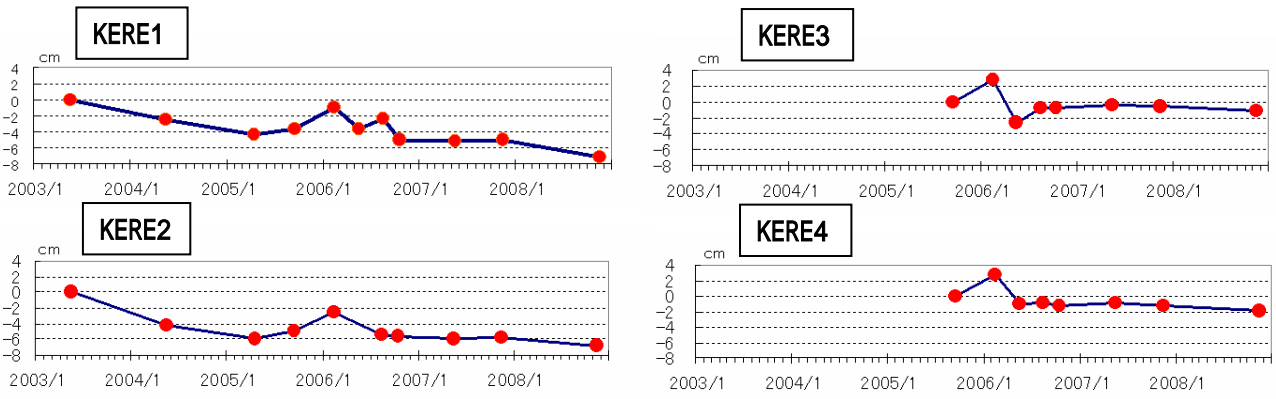


図 4 口永良部島 光波測距観測<sup>1)</sup>による斜距離変化(2003 年 5 月～2008 年 11 月 18 日)  
屋久島町口永良部島出張所と山頂にある KERE1 観測点間の斜距離に新岳火口の膨張を示す縮みの傾向が認められます。



図 5 口永良部島 光波測距観測点

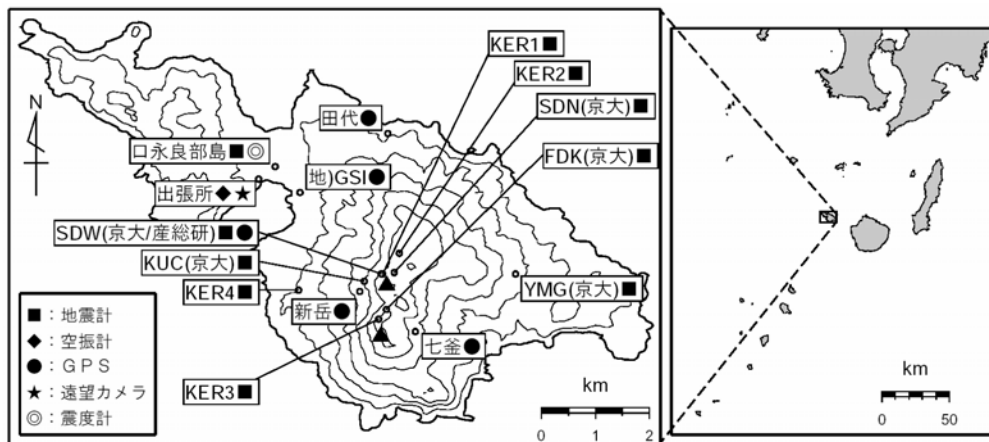


図 6 口永良部島 観測点配置図



図 7 口永良部島新岳火口を屋久島町口永良部島出張所から撮影（平成 20 年 11 月 19 日）  
火口内と火口南西側斜面から噴気が上がっていますが、噴気の量に特段の変化はありません。



図 8 撮影方向